

# Heart View [ハートビュー]

## 企画にあたって

大手信之(名古屋市立大学医学部附属東部医療センター病院長)

経胸壁心エコー図をして聴診器代わりともよばれる時代になり、経胸壁心エコー図が胸部X線写真や心電図と同じく、循環器病の初期診断に必須のツールとして認識されるようになった。心エコー装置の小型化と高性能化に伴い、point of care ultrasound (POCUS) とよばれる「ちょい当て」エコーが急速に広まりつつあり、救急現場や初診外来における初療レベルの向上に重要な役割を果たしている。一方、超音波検査室においては、心エコー装置の能力を目いっぱい引き出して、弁膜症の重症度評価・手術適応の決定、冠動脈疾患における虚血・梗塞領域の広がりの評価、高度な心機能解析を駆使しての心不全患者の病態評価などが行われている。

多くの施設で普通に実施されるようになった負荷心エコー図も、その存在を忘れてはならない。また、3次元心エコー図（経食道・経胸壁）の画質の改善は、弁膜症・先天性心疾患の診断・治療に新たな進歩をもたらしている。最近、経カテーテル大動脈弁植込み術、経皮的僧帽弁クリップ術、経皮的左心耳閉鎖術などの革新的な治療手技が循環器臨床に導入されたが、3次元法を中心とした経食道心エコー図のサポートなしには、この治療は成り立たない。

このように、心エコー図が外来初療から高度な侵襲的治療に至るまで、幅広くかつ濃密に循環器診療にかかわる画像診断ツールとして、その重要性を増したことは明らかであろう。心エコー図は、誰でもが利用可能な身近なツールであるが、その診断能力は驚くほどに高い。心エコー図を循環器診療に十分に活かすためには、得られた画像やドプラデータを正しく解釈できるように知識の向上に努めるのみならず、循環生理を深く理解し、さらに心エコー図の結果をエビデンスに基づいて治療へ展開するための“翻訳”が必要である。

これらのプロセスを読者と共有するという立ち位置から、本増刊号の内容を企画した。折しも、日本循環器学会から「2021年改訂版 循環器超音波検査の適応と判読ガイドライン」が発表されたが、本増刊号は症例をベースとして、ガイドラインで取り上げられた項目をより詳しく解説するような構成になっている。その役割を担っていただくのにふさわしいわが国の心エコー図のリーダーの先生方に執筆をお願いさせていただいた。